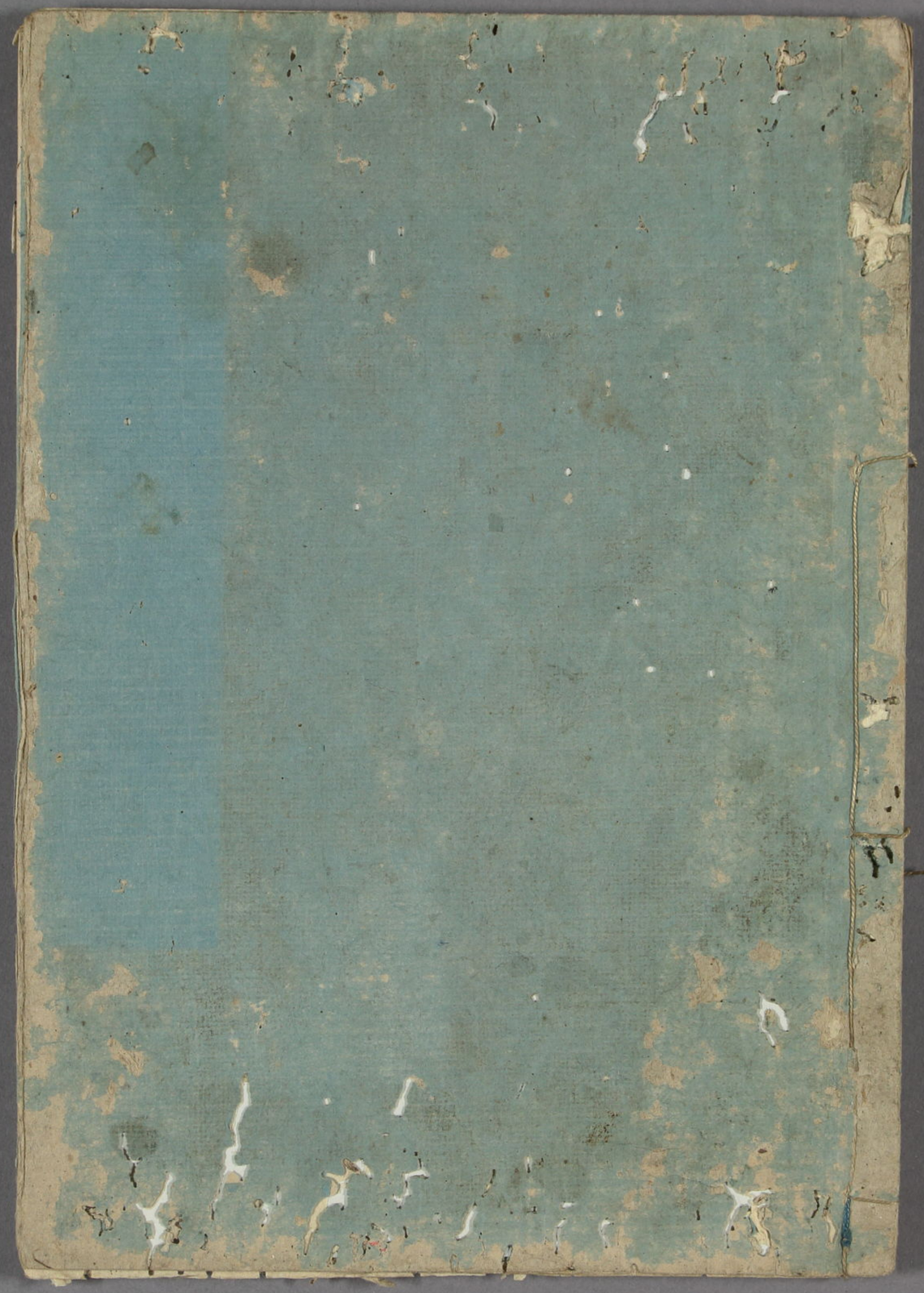

山田
百閑氏

芭蕉翁句解

高中居蕉左述

法花より星し降て寒や雲の上

此句の行ふこと多乃夜風雨あきよ遍照小町ら
等此吟まる人の毛を移さるる岩の上り猿
寒されいとまし芭蕉の葉よ我かなん小町
世代もむく
芭蕉庵に人か来ら山ふり徒む遍照又松風に
席よりなる遍照を移さる七夕よ年〇〇〇〇
絵合ね 此句芭蕉句撰よりの伝ふ所年業紫慈式の

合歓乃花　重之

新後拾遺集　七夕に寄る人々の歌

ひつくもむ　合歓ハ花のさま垂髪ゝ多ゝ　ちゝむて眠るゝ

ゝ　ゝ　ゝ　

丹野亭

[illegible]宅[illegible]骸骨の
笛鼓[illegible]
画く[illegible]の[illegible]

稲妻や新の[illegible]

秋[illegible]
この[illegible]

稲つかよさ[illegible]ぬ人の[illegible]

[illegible]師のいく吾[illegible]
百[illegible]
三十棒の[illegible]
思心念底をはら[illegible]

[illegible]川の[illegible]
[illegible]

客舎并州已十霜帰心日夜憶咸陽無端
更渡桑乾水部望并州是故郷[illegible]

[illegible]

續古今集　[illegible]

[illegible]

[illegible]

名月や池をめぐりて夜もすがら

芭蕉翁一夜の佳興多き
なり青の行とは行のかなを新やうにさしかりて下に
言い尚をりの詩を吟ずやし光まぶしかるべく
池水に出を点ずるごとく豊麗にふ雅しかるべ
きまで暁に士峯に光をおさめて扨の業拙し新も
へくかの月は行きはてしかし俳諧のかも幾世
先生の句作は宮殿の宮殿の宮殿乃無うて高きに
昇る高いかく我は高い言ふ初学

古梅の形貫はしかしかるべき光俳の長所
なるべしかるべき極い言葉は喝りとなりて長くみし
かきオは新しきかる

外貫てかの別所月見郎

荘子斗斛成而天下人始爭ふかるべ
外貫ていものなかるべし俗士の分別のかりて
有りかの原面ちかしかるべ御よ自情言べし

名月や対する思しき新しかし

四頭一笑百媚生ス六宮粉黛無顔色ラ
こめんよかるつる

蓑虫庵

今宵誰ゆえの月ぞ十六夜

新古今集　上賀茂社に侍ける頃山里に蓑虫を尋ねに遣はすとて詠める　藤原定家朝臣

月をたづね蓑虫庵の柴の戸に伊賀の山中なりけり

十六夜の月は山中に芳野人の行程なるべし

月さしよる明智の書院影せん

十六夜の行事に伊勢田乙丸云う宛るものあらんかと書の
異なるべしく拙句にあらずあるべし孫のかを歩く
書をもて彼日向守の書女婿を切て席をまきちらす
知恩寺文中おてをうつて指杖の吟あり詞を略せ
白雲をあかすまつ多し俗に袖見紙也芳野を花也

本因亭

源家やあるを月に田乙丸

山居世上田乙丸味噌八斗小者ひとりに水の給仕と
一体俳諧仕しまつり本因ハ吉法大坂の侍なり

李吟師の門人にして芭蕉翁と友とす

菊の後 古枝に残れる花かな

不是花中偏愛菊此花開後更無花といへるを
ふまへ侍りしかの金精おりひめ

園女亭

ちる菊の目もとまりてとゞまるもの

ちるを見て人のうたがふ月日かな 西上人

世をのがれ出家の人を園女と号す

武江の深川よりかなしく眼科をもとめ業成て
又洛に世を忍書をもとめ古墳に詣ず
霊巌寺高仏堂に拝世を秋の月を乃暁
うつ声に夜ゝの菊を伝ふる

本所

ちり浮世の人乃壁か
此句まことに橡の実なれ 深川山沿
若ちりしをのぼり市野を離るむしろ
夜はかりそめ人乃人を多しとそ浮世乃

二字ヲ用ル 晋摯虞入南山飢甚拾橡實而
食ス 又杜甫詩 歳収橡實隨狙公

白雨知是亭

紀氣ヤ崔ラフ宵ヲ戸の雲

淮南子説林曰湯沐具而蟣虱相吊大廈
成而燕雀相賀ス

義朝乃公ハ秋乃秀
只野原ハ白雨の秋風

〈〉歐陽永叔秋聲賦曰夫秋刑官也於時為陰
又兵象也於行為金是謂天地之義気常以肅
殺為心

旅行

ゆくゝと日いたるくも秋の風

新古今集 旅人の袖吹きかへす秋風に
さゝ〻き山乃月ぞ残れる
風雅 言外ゆくゝ〻の雲秋の
秀句 ゆく〻〻 紅葉 生涯二三章乃
他日記ゆくゝ〻

小川の名を捨くよ三ヶ月
捨るの表よ浮世の秋の菓子
なけくるる

猿を丈人　捨子秋の風いる

巴猿三叶暁霜行人之嘗　三ヶ日ふる雪に
きけそ行人の袖ひはる猿を聞くそ　まぬた
老てゆりのかすきよ丈ちら芋かきそせて　加州
詩学ヶ月ふるそ捨たる　猿の秋風ふくと暁の
猿と吹腸いつれ小ふ月ふむとそ又山を或集よ
さるをきて捨子に秋の風いるもせり白雲分明

句解下　乱書他紀行句

加州金昌寺ニて

庭掃て月やそれにちる柳

世説曰郭林宗毎行宿逆旅輒躬自灑掃及明
去後人至見之曰此必郭有道昨宿處也

らのちるかもひくるる白雲

むくけ秋又後之　相撲う

梅ちる兵庫とうぶ見城ちる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

芳野にて

[illegible]

みよしの山の秋色小倉にふく嵐のなかりけりを

けさを高雄にて

[illegible]

伊勢の町坊にて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

柱枝に鳥ゐて秋の雪

けさは季吟なる人書一流形立の茶話器の

一事なり支本集に著すすぐれたる稿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

杜牧之

[illegible]

[illegible]杜園[illegible]質[illegible]称[illegible]吟[illegible]山家

集に　巢窟[illegible]侍[illegible]時を[illegible]たゝして[illegible]

[illegible]山[illegible]ふ[illegible]いらこよ[illegible]抑合[illegible]

水苦く偃蓬嶋を圍ぜり

莊子逍遥遊　鵷鶵巢於深林不過一枝偃蓬

飲河不過滿腹[illegible]

范蠡の趙南のふもとに[illegible]

山家集[illegible]

一家もこゝに[illegible]の[illegible]

拾[illegible]食[illegible]

[illegible]西上人

[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]世[illegible]門

[illegible]の人[illegible]智[illegible]徳[illegible]功[illegible]名[illegible]

[illegible]

例ノ如賀和の[illegible]樂の心[illegible]

[illegible]勝[illegible]多度權現ハ伊勢[illegible]

[illegible]

[illegible]

長嘯乃塚

長嘯子ハ本下[illegible]

の舍[illegible]

[illegible]

[illegible]

長海を[illegible]

[illegible]

[illegible]

伝法語をうる

言ちるや穂屋の芋ばし

信州諏訪明神御射山祭七月廿七日也是紀の穂を
刈て神仮屋を造り小弓にて射て神慰す
是の作て穂屋乃神事也一里吉例多し
尾張ちくちやの竹ちくしに志りぬ墨ぬり
秋のくさやう　新古今山田の畔乃むすぶ
対人かしに成る法ふる　苅ばしの何とぬ法の
ふなかをひとをふ

東ふ吳ちよ吳ちよ吳ちよあんん

釋惠崇詩　笠重吳天雪鞋香楚地花也
年詩禪室寧憚路岐賒　ちくれ二祖寺
ちんの沐切も無へ　ちいへる山叟の稚体結ぶそ

財門人伝

ちるや世乃煙る傳ぬ　古盒子

此吟句擬笈よ古拾ふ　紀日紀ふ法師の

[illegible]一昊雅俊[illegible]通法師七[illegible]の後
[illegible]の後亭より[illegible]

[illegible]月[illegible]時[illegible]ちらき[illegible]の[illegible]

[illegible]より[illegible]に[illegible]

[illegible]の月

月夕紀師[illegible]

[illegible]の月[illegible]

又[illegible]

附録

山いろ[illegible]林の色は黄よ[illegible]

山句[illegible]句[illegible]伊賀国[illegible]

吟[illegible]句法 太山口校 [illegible]句の[illegible]の後の世[illegible]

[illegible]

[illegible]乃[illegible]乃[illegible]後[illegible]

後人風を打ぐ句々ゝ多くこの集を
おりいだくるもの也師の独日記をうつす
此句は幸崎の松乃と記はかなき海辺にて
かゝるいとも打年は月にをりをおくる音信
得て伯和集より古老の多はかなかる信りいとゝやかき
墨をりけを此一集おりい事ゝすくおて
所ゝ者ゝ者ゝ記はいくゝ才ゝい才ゝ之のをゝ行事を知る百
句中ゝもゝ月ゝ者ゝ之ゝ才

之知ゝいゝれゝゝ之本師信あき昭和元年句数多ゝ

若ゝ生ゝ秋風きくやうゝ山

此句芳良ゝ吟ゝ松くゝ行ゝ見人ゝ

おねの宮ゝ山ゝ

そのかゝは苔地ゝ小和尚

義奥おねの墓を立てゝ立ゝ松くゝ法
和ゝ尼ゝ合ゝ此句續猿蓑集ゝ公おの
吟ゝ義ゝ之ゝ写の信

とくの名も紛れ表れ
白陽須弥の瓢葉を見合し
さるが部洋の小唄家の花
樹青三百負う素裸花人の白なり
是詰とく信もえうり白乃花
杜国の白人茂の小文と合し
言あたに梁紀を也信表示

蕉の吟より所を
赤と知帆を伊風の表を
一晶の白なり
茶し赤とを茶れ切る雲表示
原中やかすまつ花吟花を
紅日紀より云 もうり吟わり 牡丹あり姫百合の
行よつくるも紀んれ紀んれ紀もうりう再
聚乃彩貴也を伊一

おとがいや歯よ歯よ歯よ

月ごとにしるしたまひし法華の文

右十七章独日記より抜きて再案再書也

書く故毎の百編なりしむ

藤乃家禅よりけしに成るなり

蓑云此句独日記に公務よりて繁忙

人を送るなり

梧桐の志のふかい月は名残哀

蓑云この句独日記より石山に行なり

太井川波よ蓑形しを乃月

清瀧乃波よ蓑笠しを乃月

浮尾の山波笠とを乃月

清瀧や波よりもむ青葉哉

蓑云この句は雅波乃病床より去年也

先くく世往園女亭にて青葉哉月見ける

尼乃蓑りはしとうるかなるを紙ふしにて元親の

ひとりかりくく青和葉に吟しくるなり

去年集ゆくるなり

宗七亭

花を宮ゐよりの移やむ日の雪
イミ花ト

蕉云花乃初中後と大概三七廿一日乃内を行る
しら雪の白きをしも雪の降と見なす

いさ青の心つもりを移るきく

蕉云此句月の新よりの集き素堂亭残菊白くと考
時雨乃雪乃落もおかしう

蕉云此句源氏白撰よりの貞享記行に合し
百はくに命を絶まる枯野かな
イミ枯野カ

冨の菊や菊はまうくく明御

蕉云この句老乃述懐なり
菊を主なり

此時より用ふる人命をのこの句源し

蕉云イニハの字別に源氏の句源を写し

菓子おとく奈良と雑煮の夕月夜
（イニ菓の事や）

夢云白法影略互顕口授

釣殿式部
（イニ釣殿を）

夢云此白い杜鵑の脚れりひ音の紙の分
かえし名所は雑乃捨ゆう釣殿白宮の紙

暑日を法へ入う宮上げ
（イニ暑し夏）

家家い四角かうけを宮乃日
（イニ）

乃る彩やよう行船も青月夜
（イニ夏）

宮うく名所名寄せる陸面の家
（イニ宮かうて）

訪杜国

れいあ代荒紀中此者の居
（イニ荒れ寺）

風呂寺ふう

黄昏ふ

杜鵑夢ふ拭ひかうる音れ
（イニ出しうて結婚の事）

杜鵑夢ふ拭ひかる音う角
（イニゴ）

蓼云田家ゴロフ山事ハ法書ヨ
ごを梦てとゆゝ得ゆゝ

月代や縁ちらくの宮 イニ雲

柳ちるふるよ浦うく

十六夜もまうく交科乃歌う明 イニ松

わつと少や明くうう抑く夕源 イニやのまかして考

この宿い出舟鶴り赤の龍ち

ほとゝぎも大竹原を浅月東 イニ薮

夏乃月伊地ち出ち赤坂や イニう

かゆゝ活くい活くかりむ和江 イニを

田家

麦飯よ

名月いふ月ゆう活ち東う猫の書 イニ里の猫

一尾根ち志ち原ち東の書 イニ秋田の月

田渕解

跋

翁之遺藻流世也久矣乃
涂指好士莫不欣之宜乎
有遺味則俾人一唱三歎
唯膚淺之徒以爲是雖玄
酒大羹也古拙無味蓋知
其眞者鮮矣雪中薤玉嗜
之入鹽曉有羊于此業已

識勞薪所炊之純辨滔滔
意其多年之所味掩心法
彼冀今他屬厭而已耳所
謂吻〻鳴鹿取其麤倒其
心在斯乎其亦在斯乎
爻人東志書于遺逸園

昌平坂學問所
東京帝國大學